

# 原爆文学研究会報

第二七号

原爆文学研究会 二〇〇九年七月

空想特撮の核 寡聞にしてバルタン星人に核が深く関わっていることを知らなかった。先日、『ウルトラマン』の第二話（一九六六年）を観る機会があったのだが、そこでの核の描かれ方は私をうならせるものであった。作中、バルタン星人が地球へやって来た目的は次のように語られる。（彼らの星「バルタン」は、ある発狂した科学者の核実験がもとで爆発してしまったのである。宇宙旅行中だった彼らは帰る場所を失い、しかたなく彼らの生存できる天体を求めて地球の近くまで来たのだ。あいにく宇宙船の重力バランスが狂い、修理をするために立ち寄ったというのであった）。彼らの宇宙船には「バクテリアぐらいの大きさ」に自らを極小化した二〇億三〇〇〇万人のバルタン星人が眠っているのだという。地球へ住むことにしたという彼らの言い分を聞いた地球人達は（何てずうずうしい奴らだ）話にならん。世界中の人口合わせたつて二二億だつて言うのに）（火星に住んだらどうだ）と猛反発。交渉は決裂し両者は武力衝突へ至る。

この後、数十メートルにまで巨大化したバルタン星人へ向けて自衛隊ならぬ「防衛隊」は核ミサイル「はげたか」二発を発射する。「核の被害者」に加えられる核攻撃——。高層ビル立ち並ぶ都市部での核使用である。しかし、それではバルタン星人を倒せず、続いて登場するウルトラマンがバルタン星人をその宇宙船もろとも撃破。ウルトラマンは核より強い……というより核はウルトラマンの強さを示すための「咬ませ犬」にしかなくなっていない。

核実験（ちなみに六六年までに米・ソ・英・仏・中が行った核実験は計七六回——新起源社『核兵器事典』、難民、人口増加、日本の核武装……改めて考えれば、この第二話には多くのデリケートな問題が凝縮されている。そして、それら全てが無気味なほどに非デリケート

なものとして描かれている。容姿や慣習が違う「異人」は何人殺しても良いのであり、都市で使えるクリーンな核は何発使っても良い。かつて林京子は「スペル星人」（『ウルトラセブン』第二話に登場する全身にケロイド状の模様がある異星人。別名「ひばくせい人」）について（これはこれでいい。漫画であれピエロであれ誰かが何かを感じてくれる）と語った（『祭りの場』）。しかし、空想特撮は（何かを感じ）る感覚を鈍磨させる諸刃の剣なのかもしれない。難しいことだが、私も私の鈍感さには自覚的でありたいと思っている。（中野和典）

## 第二七回 原爆文学研究会報告

二〇〇九年五月五日（火）九州大学西新プラザで開催した第二七回研究会には約二〇名が参加。



雨宮氏の発表については「不眠の祭り」等の他作品や古井の空襲体験とも関連づけて論じる必要があるのではないかと、「先導獣の話」が持つ「原爆文学」という枠組みを再編する可能性について論じた方が良いのではないかと等々の質疑がありました。

中原氏の発表については「視点の移動による対象の変化の仕方には何らかの傾向があるのか」「どこか被爆者を連想させる池野巖の装幀と詩集との関係をどのように考えれば良いのか」等の質疑がありました。

◇ 研究発表1

# 古井由吉 「殲滅兵器」という問題

古井由吉 『先導獣の話』 論

雨宮 幸明

本報告は古井由吉の初期作品『先導獣の話』（『白描』一九六八年一月）において言及される「殲滅兵器」という言葉を考察の対象としたものである。これまで高度経済成長下の急激な都市化の問題を扱った作品として評価を受けてきたこの作品を、作品内で唐突に挿入される「殲滅兵器」という言葉から、一九六〇年代の戦後日本社会における米ソ冷戦下の日常生活の意識に由来する核の恐怖、もしくは原爆の痕跡を書き残した作品として読み直すことができないか、そのような視点から作品内容の検討を試みた。

『先導獣の話』において語り手は、ある日地下鉄のラッシュに殺到する群衆の規則正しい整然さに「最も訓練された」人間たちを見るのだが、やがてその整然さを破る「群衆にパニックを惹き起こさせるものとは何か」と考え始める。「先導獣」という言葉が思い浮かぶ。「先導獣」とは群れを危険から守るために群れを率いるリーダーの獣を意味する。この「先導獣」が群れを意味のない狂奔へと走らせることもあるのではないか。語り手は「群衆」に「パニック」を惹き起こす「先導獣」とはどのようなものであるか、取り留めの無い「個」と「群れ」の思索にふけりこんでいく。以上がこの小説の主な内容である。

「殲滅兵器」という言葉はこのような都市情景への疑問から発せ

られる。それは地下鉄で男同士の喧嘩を目撃した語り手がその暴力の情景から「唐突として殲滅兵器のことを」考えはじめる場面にある。地下鉄を待つ朝の群衆に溶け込みながら、互いに突きつけあう暴力を同時に隠そうとする、その奇妙なやりとりの緊張感に語り手は、「いつ崩れ落ちるかもしれないドームの下で暮らしている者」たちを想像する。小さな暴力の情景から生まれた想像は、「いつ崩れ落ちるかもしれない」核抑止という新たな秩序であるキューバ危機を連想させる、奔放な「殲滅兵器」への脅威を思い描いていく。語り手が想像する核の脅威を思わせる「ボタン」と「殲滅兵器」の存在は既に十分に一九六〇年代における「現実」の一面であったことは間違いない。語り手はしかし、その「現実」への想像が「現実」に及ばないことを指摘する。この作品には、このように核時代の想像力の問題を考察するに十分な要素があると考えることができるのである。また、近年の創作活動において古井由吉は小説『野川』などで、戦時下の空襲における自身の被災体験を主軸に様々な記憶と身体の問題を描いており、古井由吉の作品の原点として強大な暴力の脅威を示す「殲滅兵器」という言葉の内容を検討することは、このような近年に至る古井由吉の空襲とその被災者の記憶を描き出す経緯とも不可分なものと考えられる。

今回、質疑応答において、研究会参加者の方々より様々な疑問や重要な指摘をいただくことによつて、「殲滅兵器」という言葉の解釈の多様性、想像力の問題、核及び原爆との関係性について、さらなる論考の練り直しが必要であることを教えられた。深く感謝を申し上げるとともに今後とも『先導獣の話』という多面的な作品について、より広い視野から「殲滅兵器」という問題を考えたい。

◇ 研究発表2

山田かんの詩——『アスファルトに仔猫の耳』を中心に

中原 豊

山田かんの第四詩集『アスファルトに仔猫の耳』は、一九七五年一月に炮岬社から刊行された。山田自身はこの詩集について、詩集「後記」においては「作品の展がりからも、その素材(引用者注・長崎原爆被災体験)のみに必ずしもこだわらない方針を樹てた」といい、また『長崎・詩と詩人たち——反原爆表現の系譜——』(汐文社 一九八四年一月)においては「それにしてもなお、被爆の影は多くの作品にさまざまな陰翳をもつて投影しているということは、少年時の被爆の体験より逃れえぬ以上、それは既に資質的なものになっているともいえるが、詩が詩として存在すべき根底を、掘り下げる時期に逢着しているといえる。」と述べている。この詩集の考察を通じて、いわゆる「原爆詩人」というレッテルを離れて山田の詩の本質的なものを捉え、そこから改めて被爆体験の影響を捉え直すことができるのではないかと思う。

『アスファルトに仔猫の耳』は詩一九篇を収め、「I 伝説から未来へ(一九五二—一九五五)」、「II 鯨と馬(一九五六—一九六五)」、「III アスファルトに仔猫の耳(一九六六—一九七四)」、「(八九篇)」の三部構成をとる。詩篇の配列がほぼ成立年代順になっているのは他の詩集と同様だが、パートの年代の区切り方とタイトルに選ばれた詩篇とに、当時の山田が自らの詩人としての遍歴を

どのように捉えていたかが現れている。

山田の年譜を重ね合わせると、パートIはサークル誌「芽だち」(一九五二年創刊)への参加から同人誌「地人」(一九五五年創刊)への参加までの時期にあたり、「伝説から未来へ」は初めて『列島詩集1955』(一九五五・一一)に採録された詩である。アジテーション・プロバガンダ的な傾向の強い詩から出発し、「列島」への投稿を通じてそこから脱却しようとしていた時期の詩である。

続くふたつのパートはほぼ十年を単位としているが、パートIIの区切りは自らが主宰した同人誌「橋」(一九六一—六五)の終刊と重なっている。「鯨と馬」は第一回現代詩新人賞を受賞した詩であり、シュールレアリスムの表現を摂取しながらアヴァンギャルドとリアリズムの統一を標榜した「列島」「現代詩」と続く戦後詩の一潮流の影響を色濃く示している。

パートIIIは一九六八年に創刊した同人誌「炮岬」発表の詩が中心となっている。詩集全体のタイトルにもなっている「アスファルトに仔猫の耳」では視点が移動していく点に特徴があるが、これは山田の詩全体の特徴の一つでもある。移動は詩の主体が生きる現実の時間の進行を現し、また戦後社会の変貌とも重なっている。「浦上へ」「地点通過」といった初期の詩には、同じ視点移動のモチーフをもちながらも、被爆という動かない時間と日常の動いていく時間との対比が明瞭だが、「アスファルトに仔猫の耳」ではふたつの時間が混濁し幻視的なイメージとして現れており、「原爆詩」の代表作とは異なる大きな特徴がある。

## 彙報

### 第二七回 原爆文学研究会

○日時 二〇〇九年五月五日(火) 一四時より

○会場 九州大学西新プラザ中会議室

○研究発表

「殲滅兵器」という問題

く古井由吉「先導獣の話」論く

雨宮 幸明

山田かんの詩

——『アスファルトに仔猫の耳』を中心に

中原 豊

### 機関誌「原爆文学研究」第八号原稿募集

本研究会が年に一回発行している「原爆文学研究」の原稿を左記の要領で募集します。この機関誌には「原爆文学」の評論の他、エッセイ等も掲載します。奮ってご投稿下さい。

○書 式 縦書き、二九字×二四行、二段組。

○投稿締切 手書きやプリントアウト原稿での投稿の場合は二〇〇

九年一〇月中旬、データファイル(Wordか太郎)を添付しての投稿の場合は同年一〇月末日。

○発行経費 投稿者は、各自の原稿一頁(機関誌の書式)につき、一、

〇〇〇円を発行経費として負担する。

○投稿宛先 〒八五七一一一九三 佐世保市沖新町一一一

佐世保工業高等専門学校 中野和典研究室

## 編集後記

最近、他の研究会や学会から研究会の合同開催の相談をお寄せいただくことが続いております。別紙のご案内の通り、次回(第二八回)の研究会は戦後文化運動合同研究会と合同開催をする運びとなりました。本会発足以来八年半、少しずつ原爆文学研究会の活動が世に知られるようになってきているということでしょうか。本会の活動に興味を示していただき、合同開催を、と声を掛けていただけることは大変ありがたいことです。

もちろん原爆と文学をめぐる現状は到底樂觀できるものではありません。しかし、だからこそ一つ一つの研究会を大切にしていきたい。そして、機関誌「原爆文学研究」も良いものにしてゆきたい。現在、一編集者として気になっているのは第八号のことです。近年、会員諸氏もますます多忙になっておられるようで、なかなか研究のためのまとまった時間を確保できないのが現実だと思えます。と思う一方で「しかし、だからこそ」と自らを励まし続けてもおります。上記の通り一〇月末日まで受け付けておりますので、会員諸氏には積極的にご投稿いただきますようお願い申し上げます。

(中野和典)

発行元 原爆文学研究会事務局

〒八一九一〇三九五 福岡市西区元岡七四四

九州大学大学院比較社会文化研究院 波瀾剛研究室内

tel/fax 092-802-5631 e-mail [tnamigata@scs.kyushu-u.ac.jp](mailto:tnamigata@scs.kyushu-u.ac.jp)

URL <http://www.scs.kyushu-u.ac.jp/~th/genbunken/index.htm>